

仙台平野の遺跡群 29

平成 30 年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

南小泉遺跡第 83 次、富沢館跡第 7 次、中田北遺跡第 2 次

2019 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残っております。これらの一つ一つは、先人たちが残した貴重な文化遺産です。

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災より 8 年が経ち、復興・創生期間 3 年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届の件数や発掘調査の件数は、平成 23 年度以降、震災前を上回る状況が継続しております。仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々務めているところです。

本報告書には、個人住宅建設に伴って平成 29 ~ 30 年度にかけて発掘調査を実施した、南小泉遺跡第 83 次調査、富沢館跡第 7 次調査、中田北遺跡第 2 次調査の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を将来へ伝えるために護るべき大切な財産です。先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根柢をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より深く感謝申し上げます。

平成 31 年 3 月

仙台市教育委員会
教育長 佐々木 洋

例　　言

1. 本書は、平成30年度個人住宅他国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書であり、南小泉遺跡第83次、富沢館跡第7次、中田北遺跡第2次の各発掘調査報告書を合本したものである。
2. 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は三浦一樹が行った。

第1章・第4章・第5章・第6章—三浦一樹　　第2章—及川謙作　　第3章—小林航
遺物の基礎整理—斎野裕彦、三浦一樹、渡部弘美、向田整理室作業員
遺物図・遺構図デジタルトレースー向田整理室作業員
遺構註記表作成—各担当職員、向田整理室作業員
遺物写真撮影・図版作成—向田整理室作業員
遺構写真図版作成—三浦一樹
3. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本文中の「遺跡範囲と周辺の遺跡図」は、国土地理院発行の「2万5千分の1地形図」を、また、「調査区位置図」などは仙台市発行の「2千5百分の1都市基本図」を、それぞれ修正して使用した。
2. 平面図中に示した方位は概略である。
3. 第3章（第10図）の座標は世界測地系を使用している。
4. 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。

SD：溝跡　　SI：堅穴住居跡　　SK：土坑　　P：ピット
5. 遺物の略称は以下の通りである。

A：縄文土器　　B：弥生土器　　C：土師器（非ロクロ調整）　　D：土師器（ロクロ調整）・赤焼土器
E：須恵器　　F：丸瓦　　G：平瓦　　H：その他の瓦　　Ia：土師質土器　　Ib：瓦質土器　　Ic：陶器
J：磁器　　K：石器・石製品　　L：木製品　　N：金属製品　　O：自然遺物　　P：土製品
6. 土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原1999）を使用した。
7. 遺構図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。また、各図に必要に応じて凡例を付した。



8. 遺物写真的縮尺は3分の1とした。

目 次

第1章 調査計画と実績	1
第1節 調査体制	1
第2節 調査計画	1
第3節 調査実績	1
第2章 南小泉遺跡の調査	3
第1節 遺跡の概要	3
第2節 第83次調査	3
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第3章 富沢館跡の調査	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 第7次調査	9
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第4章 中田北遺跡の調査	14
第1節 遺跡の概要	14
第2節 第2次調査	15
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第5章 郡山遺跡の調査	20
第6章 総括	21

挿図目次

第1図 平成29・30年度調査地点位置図	2
第2図 南小泉遺跡と周辺の遺跡	3
第3図 第83次調査区位置図	4
第4図 第83次調査区配置図	4
第5図 第83次調査区平面・断面図	5
第6図 富沢館跡と周辺の遺跡	9
第7図 第7次調査区位置図	10

第8図 第7次調査区配置図	10
第9図 第7次調査区平面・断面図	11
第10図 富沢館跡 検出遺跡位置図	12
第11図 中田北遺跡と周辺の遺跡	14
第12図 第2次調査区位置図	15
第13図 第2次調査区配置図	15
第14図 第2次調査区平面・断面図	16
第15図 郡山遺跡調査区位置図	20

挿表目次

表1 平成29年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧	1
表2 平成30年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧	2
表3 平成30年度 郡山遺跡発掘調査一覧	20

写真図版目次

写真図版1 南小泉遺跡第83次調査（1）	7
写真図版2 南小泉遺跡第83次調査（2）	8
写真図版3 富沢館跡第7次調査	13
写真図版4 中田北遺跡第2次調査（1）	18
写真図版5 中田北遺跡第2次調査（2）・出土遺物	19

第1章 調査計画と実績

第1節 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

平成29年度

【文化財課】課長 長島栄一

【調査調整係】係長 平間亮輔

主任 鈴木 隆

主事 及川謙作

文化財教諭 佐藤 悅一

専門員 渡部弘美

庄子裕美 小林 航 三浦一樹 妹尾一樹 柳澤 楓

佐藤慶一 大友 渉 及川 基

斎野裕彦

【整備活用係】係長 佐藤 淳

主任 稲垣正志 小野寺啓次

主事 五十嵐 愛

文化財教諭 小山聰明

高橋和也 三浦昂也

平成30年度

【文化財課】課長 長島栄一

【調査調整係】係長 平間亮輔

主任 及川謙作

主事 小林 航 三浦一樹 妹尾一樹 相川ひとみ 柳澤 楓

文化財教諭 大友 渉 栗和田祥郎 佐藤文征 尾形隆寛 及川 基

専門員 渡部弘美 斎野裕彦

庄子裕美

斎藤健一

【整備活用係】係長 佐藤 淳

主任 稲垣正志 小野寺啓次

主事 庄子裕美 五十嵐 愛

文化財教諭 斎藤健一 三浦昂也

第2節 調査計画

主に個人専用住宅の建築に伴う発掘調査費用の補助を目的とし、「個人専用住宅補助事業費」として、総額9,865千円（このうち国庫補助金額4,932千円）の予算で31件の調査を計画した。

第3節 調査実績

平成29～30年度にかけて（平成30年2月～12月）実施された調査は表1・2の通りで、合計31件である。

このうち本書に収録したのは3件である。

団体名	調査年	調査名	所在地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	調査期間	遺構・遺物	届出年	報告書
1	H29-02	仙台市役所跡地	若林区本ノ下二丁目	632.0	54.0	2月20日	遺跡、瓦片他少	H29.102-081	—
2	H29-06	中央支那銀行跡地	若林区荒井字北原町	72.9	9.0	2月26日	遺構・遺物なし	H29.102-076	—
3	H29-09	後半前田跡	若林区二の森	63.6	6.4	3月12日	遺構・遺物なし	H29.102-067	—

表1 平成29年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧

(平成30年2月～3月)



第1図 平成29・30年度調査地点位置図（国土地理院地図を一部改変）

ID#	調査番号	道路名	所在地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	調査期間	道構・道物	届出番号	報告書
1	H30-2	下若瀬路	舟岡区富岡字御木	80.5	—	4月11日	道構・道物なし	030 162-321	—
2	H30-4	南小泉路	若林区葛井字小泉二丁目	67.0	18.0	4月16日	道構・道物なし	030 162-632	—
3	H30-6	西山道	太白区西山二丁目	62.5	15.0	4月19日	道構・道物なし	030 162-653	—
4	H30-10	富沢路	太白区富沢字宇附	130.3	12.0	5月15日	道構なし・道物なし	030 162-670	—
5	H30-11	富沢路	太白区富沢字宇附	64.8	12.0	5月17日	道構・道物なし	030 162-674	—
6	H30-12	船岡泥炭A道	太白区富沢字吉崎・京ノ北	59.7	12.0	5月28日	道構・道物なし	030 162-668	—
7	H30-13	南小泉路	若林区葛井字小泉一木町	117.6	16.0	6月6日	道構なし・災害跡	030 162-663	—
8	H30-15	大野田官衙瀬路	太白区大野田町丁目	113.2	16.0	6月7日	道構・道物なし	030 162-675	—
9	H30-22	羽根安前A道	太白区大田町丁目	40.3	12.0	6月25日	道構・道物なし	030 162-656	—
10	H30-23	南小泉路	若林区葛井見尾二丁目	89.2	12.0	6月28日	道構なし	030 162-686	—
11	H30-26	沖ノ瀬路	太白区中田町字沖ノ瀬北	56.5	9.0	7月3日	ビット・道構少	030 162-128	—
12	H30-29	南小泉路	吉塙野区葛井切丁瀬東北	68.7	9.0	7月18日	土被り少、植物物少	030 162-160	—
13	H30-35	沖ノ瀬路	太白区中田町字沖ノ瀬北	55.1	9.0	7月26日	道構なし・道物少	030 162-154	—
14	H30-37	中田北道	太白区中田町七丁目	108.5	10.0	8月2日～3日	堅立柱埋設時2か、植物少	030 162-139	第2次
15	H30-39	小鶴道	吉塙野区葛井切丁瀬東北	73.3	8.0	8月24日	ビット・道構なし	030 162-132	—
16	H30-42	富沢路	太白区富沢字宇附	89.7	8.0	8月28日	道構・道物少	030 162-221	第7次
17	H30-44	南小泉路	若林区葛井字小泉二丁目	56.0	30.6	9月5日～7日	堅穴柱埋設2か	030 162-218	第8次
18	H30-46	鹿棚道	太白区中田町七丁目	100.0	12.0	9月13日～14日	堅8	030 162-264	—
19	H30-49	岩切道	吉塙野区葛井切丁入山	65.0	6.3	9月26日	道構・道物少	030 162-272	—
20	H30-50	南小泉路	若林区葛井見尾二丁目	64.4	16.0	10月4日	道構・道物なし	030 162-238	—
21	H30-54	沖ノ瀬路	太白区中田町字沖ノ瀬	57.1	7.5	10月10日	道構・道物なし	030 162-293	—
22	H30-57	洞J口道	吉塙野区葛井切丁J口	69.4	17.5	10月22日～23日	土被り少、土師器など	030 162-247	次年度以降
23	H30-62	今市道	吉塙野区葛井切丁三所北	70.4	16.0	11月15日	道構なし	030 162-377	—
24	H30-65	J下ノ内道	太白区長町南丁目	82.0	9.0	11月28日	道構・道物なし	030 162-355	—
25	H30-70	南小泉路	若林区葛井見尾二丁目	80.0	15.0	12月5日～7日	堅穴柱埋設	030 162-370	次年度以降
26	H30-71	酒ノ黒道	吉塙野区葛井切丁三所北	57.3	12.0	12月11日	道構・道物なし	030 162-422	—
27	H30-73	中田南道	太白区中田町七丁目	68.7	12.0	12月13日	土坂・柱穴	030 162-370	次年度以降
28	H30-75	酒ノ黒道	吉塙野区葛井切丁酒無	37.0	6.0	12月17日	地形・不明道構	030 162-266	—

表2 平成30年度個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧

(平成30年4月～12月)

第2章 南小泉遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

南小泉遺跡は、仙台市若林区南小泉、古城、達見塚、霞目に所在する。JR仙台駅から南東約3.5kmの地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点より北へ約3kmの場所にあり、「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は東西約2km、南北約1kmに及んでおり、仙台市内でも最大級の規模を持つ遺跡である。

遺跡内には達見塚古墳を含み、また、西部では若林城跡、北西部で養種園遺跡と接している。周辺には法領塚古墳、蛇塚古墳、猫塚古墳などが分布している。本遺跡は、これまでに82次の調査が実施されており、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に古墳時代中期に関しては、東北地方南部の土器型式である「南小泉式」の標識遺跡となっている。これまでの調査で60軒以上の堅穴住居跡が検出されており、仙台平野において有数の集落であったものと考えられている。

第2節 第83次調査

1. 調査要項

遺 跡 名	南小泉遺跡
(宮城県遺跡登録番号 01021)	
調 査 地 点	若林区南小泉2丁目42番14
調 査 期 間	平成30年9月5日～9月7日
調査対象面積	55.99 m ² (敷地面積 166.60 m ²)
調査面積	30.6 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課
	調査調整係
担当職員	主任 及川謙作 主事 柳澤 楓 文化財教諭 栗和田洋郎 尾形隆寛



第2図 南小泉遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成30年8月8日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成30年8月9日付H30教生文第102-218号で通知)に基づき実施した。

調査区は当初建築範囲内に南北4.5m×東西3.0mの規模で設定した。重機を用いて盛土およびI層を除去し、II層上面(GL-0.75m)で遺構検出作業を行った。その結果、堅穴住居跡2軒、土坑1基、ピット2基を確認した。確認された遺構が、建築予定範囲内の西側にさらに広がることが想定されたことから、東側調査区の遺構の掘削および計測、写真撮影を行った後に、建築予定範囲の南北側も南北5.0m×東西3.0mの規模で重機により盛土およびI層を除去し、遺構検出作業を行った。その結果、調査区の西側まで堅穴住居跡が広がっているものの、調査区の西側の大部分は擾乱により削平されていることが判明した。



第3図 第83次調査区位置図

遺構の精査後、平面図 ($S=1/20$)、調査区東壁、および各遺構の土層断面図 ($S=1/20$) を作成し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。埋戻しは9月7日に重機で締固めを行ながら実施した。

3. 基本層序

調査区の盛土厚は約45～65cmであり、その下で基本層を大別2層確認した。現地表面から遺構検出面であるII層上面までの深さは約0.75mである。

I a層：10YR2/3 黒褐色シルト。炭化粒が少量混入する。耕作土と考えられる。

層厚は10～20cmである。

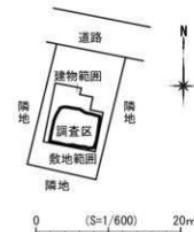
I b層：10YR3/4 暗褐色シルト。酸化鉄粒が斑状に混入する。旧耕作土と考え

られる。層厚は約0～14cmである。

I c層：10YR4/4 褐色シルト。色調がII層に類似する。層厚は0～12cmである。

II 層：10YR4/4 褐色砂質シルト。粘性はやや弱く、しまりはやや強い。今回の調査の遺構検出面である。層

厚は40cm以上である。



第4図 第83次調査区配置図

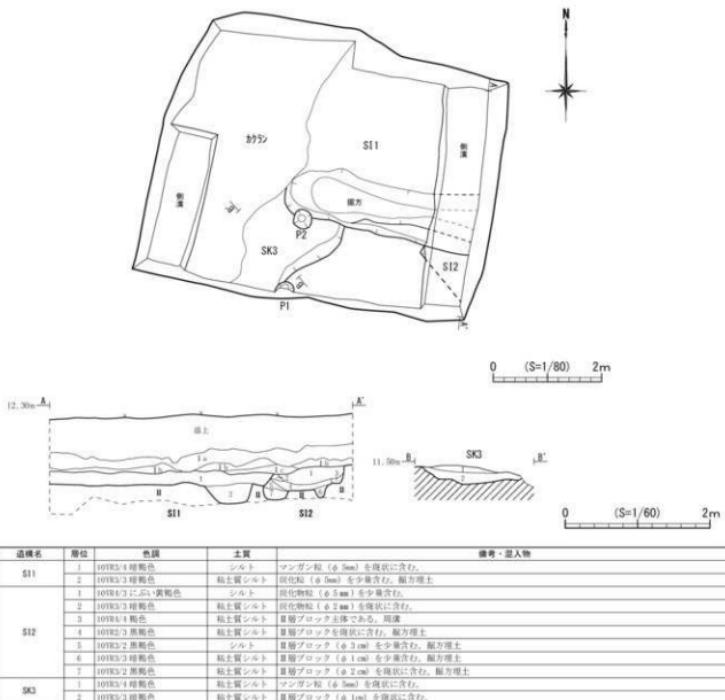
4. 発見遺構と出土遺物

竪穴住居跡2軒、土坑1基、ピット2基を確認した。また基本層および各遺構と遺構検出面から土師器、須恵器などの遺物が出土している。

(1) 竪穴住居跡

S11 竪穴住居跡（第5図）

調査区の東部で南辺と西辺の一部が検出された。S12 竪穴住居跡、SK3 土坑、P2 と重複し、S12・SK3 よりも新しく、P2 よりも古い。西辺の大部分は擾乱により削平されている。平面形状は楕円形を呈すると考えられる。規模は東西約3.5m以上、南北約3.35m以上で調査区の東側にさらに広がる。遺構検出面から床面までの深さは約20cmである。



第5図 第83次調査区平面・断面図

壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。遺構の南辺付近の床面からは、構状に掘り込まれた掘方埋土が検出された。掘方埋土の規模は幅約 60 ~ 90 cmで深さは約 26 cmである。カマドや周溝などの施設は検出されなかつた。

遺物は堆積土中と掘方埋土から、非クロコ成形の土器器甕の破片と、器種は不明ながら須恵器が出土している。いずれも小破片であるため図示はできず、詳細な年代等は不明である。

S12 穫穴住居跡（第5図）

調査区の南東部で遺構の南西辺の一部が検出された。S11 穫穴住居跡と重複し、これよりも古い。遺構の規模は東西約 1.25 mで調査区の南東側にさらに広がる。部分的な検出にとどまるため平面形状は不明だが、土層断面の堆積土の状況から竪穴住居跡と判断した。遺構検出面から床面と想定される層までの深さは約 25 cmである。周溝および掘方埋土、下層のピットと推定される落ち込みが調査区東壁の土層断面で確認されている。周溝の深さは約 10 cmである。遺構検出面から掘方埋土までの深さは約 46 cmである。遺物は出土していない。

(2) 土坑

SK3 土坑（第5図）

調査区の南部で遺構の南東辺の一部が検出された。SI1 壊穴住居跡、P1・2 と重複し、これらよりも古い。遺構の規模は 1.75 m で調査区の南側にさらに広がる。平面形状は不明だが、壊穴住居跡か壊穴遺構の可能性がある。遺構の西側は擾乱により削平されている。遺構検出面から底面までの深さは約 20 cm である。遺物は土師器の小破片が少量化出土している。

(3) ピット

調査区からは 2 基のピットが検出された。ピットの規模は径 35 cm で、遺構検出面からの深さは 10 ~ 15 cm である。柱痕跡は確認されなかった。遺物が出土しなかったため、いざれも時期は不明である。

5.まとめ

今回の調査地点は南小泉遺跡の北西部に位置する。今回の調査では壊穴住居跡 2 軒、土坑 1 基、ピット 2 基が検出された。壊穴住居跡からの出土遺物は小片のみで数も少ないため詳細な時期は不明だが、古墳時代から古代と考えられる。

今回の調査地点の近隣では、北側に所在する南小泉遺跡第 28 次調査区と北東側に位置する第 33 次調査区から 7 世紀後葉から 9 世紀の時期の壊穴住居跡が検出されている。また北西側に位置する養種園遺跡第 1 次調査区と西側に位置する第 3 次調査区からも 6 世紀から 9 世紀にかけての壊穴住居跡が検出されている。今回検出された壊穴住居跡は、これら周辺の調査区で検出されている壊穴住居跡等を中心構成された集落の一部であるものと考えられる。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1997 『養種園遺跡 発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 214 集（第 1 次）
- 仙台市教育委員会 2001 『八木山緑町遺跡ほか 発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 253 集（南小泉遺跡第 33 次）
- 仙台市教育委員会 2003 『国分寺東遺跡他 発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 266 集（養種園遺跡第 3 次）
- 仙台市教育委員会 2004 『保春院前遺跡他 発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 274 集（南小泉遺跡第 40 次・養種園遺跡第 4 次）
- 仙台市教育委員会 2005 『山田本町遺跡他 発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 287 集（養種園遺跡第 5 次）
- 仙台市教育委員会 2007 『松森城跡他 発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 310 集（養種園遺跡第 6 次）
- 仙台市教育委員会 2008 『南小泉遺跡 第 28 次調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 325 集
- 仙台市教育委員会 2009 『養種園遺跡第 2 次 保春院前遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 344 集
- 仙台市教育委員会 2012 『郡山遺跡他 発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 405 集（養種園遺跡第 8 次）



1. 調査区東側造構検出状況（南から）



2. SII 竪穴住居跡床面完掘状況（南から）



3. 調査区東壁断面（西から）



4. SII 竪穴住居跡掘方完掘状況（南から）



5. SII 竪穴住居跡掘方完掘状況（西から）

写真図版 1 南小泉遺跡第83次調査（1）



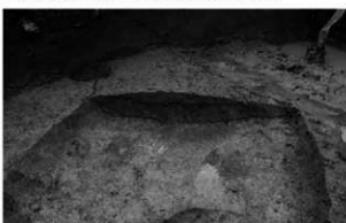
1. 調査区西側遺構検出状況（北東から）



2. 調査区西側遺構完掘状況（北東から）



3. 調査区西側遺構完掘状況（北から）



4. SK3 土坑断面（北東から）



5. 調査区内作業状況（南から）

写真図版2 南小泉遺跡第83次調査（2）

第3章 富沢館跡の調査

第1節 遺跡の概要

富沢館跡は仙台市太白区富沢字館、熊ノ前に所在する。仙台市の南部、地下鉄南北線富沢駅から西へ約700mに位置し、名取川の支流である笊川によって形成された自然堤防上に立地する。現況での標高は14～18m程度である。

富沢館跡はこれまでに6次にわたる調査が行われており、縄文時代・古代・中世の時期の遺構・遺物が発見されている。

縄文時代では後期中葉の宝ヶ峯式の時期を主体として堅穴住居跡などの遺構が確認されている。

古代では炉跡を伴う堅穴遺構が複数確認されている。これらの時期は9世紀から10世紀と推定され、鐵滓が出土した堅穴遺構もあることから鍛冶関連遺構と考えられている（仙台市教委2018）。

中世になるとこの地域は北目領と呼ばれ、国人領主栗野氏の支配下となり、城館が造営される。この館の詳細な造営時期や造営者は不明であるが、入生田家に残る『入生田家之故実』において北目城主であった栗野大善の造営によるものとされ、地域の伝承では、栗野氏臣の富沢伊賀守が居城したとされる。

近世になると入生田家の在郷屋敷となり、『館記』には二代仙台藩主伊達忠宗の時、堀や土塁があつて城や要害のようで誤解を招くとのことから、土塁を崩し、堀を埋めたとの記述がある。その後は一部の土塁を残して、この地を畠や水田として利用していたと考えられる。

第2節 第7次調査

1. 調査項目

遺 跡 名 富沢館跡（宮城県遺跡登録番号01246）

調 査 地 点 仙台市太白区富沢字館 61番、62番、63番1、73番1の各一部

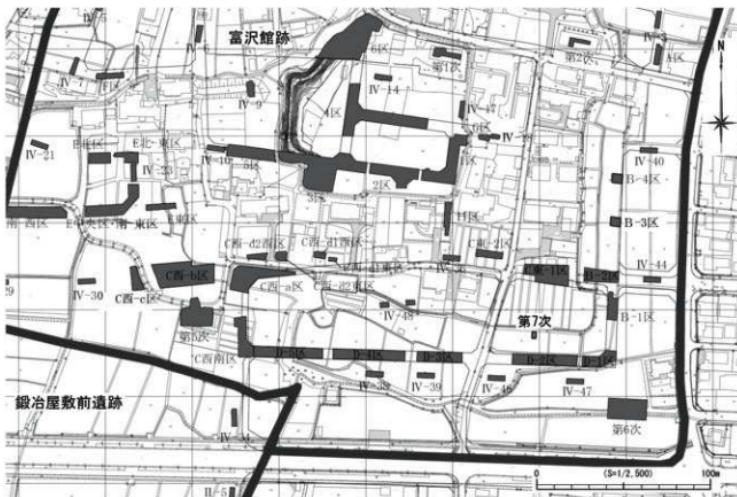
調 査 期 間 平成30年8月28日

調査対象面積 89.71 m²

調査面積 8.0 m²



第6図 富沢館跡と周辺の遺跡



第7図 第7次調査区位置図（仙台市文化財調査報告書第466集所収の図を改変）

調査原因 個人住宅の建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育生涯学習部文化財課調査調整係

担当職員 主事 小林 航 相川ひとみ

文化財教諭 尾形隆寛

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より平成30年8月8日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成30年8月9日付H30教生文第102-221号で通知）に基づき実施した。

調査区は建築予定範囲内に $4.0 \times 2.0\text{m}$ の規模で設定し、重機により盛土およびI・II層を除去した。III層上面（GL-1.2m）で遺構検出作業を行ったところ、溝跡1条を確認した。予定掘削深度の関係から溝跡の完掘は行わなかった。

調査では、調査区平面図（S=1/40）および断面図（S=1/20）を作成し、記録写真的撮影はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

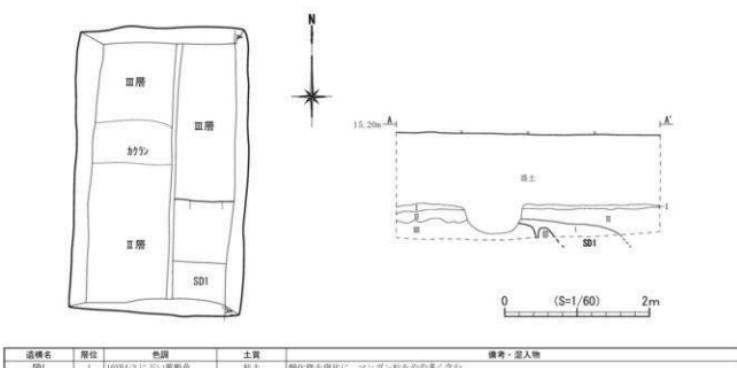
3. 基本層序

今回の調査では、盛土（層厚100cm）の下で、基本層を3層確認した。

I層：10YR4/1灰黄褐色粘土質シルト。酸化鉄を斑状に少量含む。周辺の調査において広く確認されている現代水田耕作土である。層厚5~8cm。



第8図 第7次調査区配置図



第9図 第7次調査区平面・断面図

II層：10YR3/3 暗褐色粘土。しまりがやや弱く粘性がやや強い。酸化鉄を多く含む。SD1溝跡の直上で溝跡が窪んでいるため、厚く堆積している。層厚12cm～45cm以上。

III層：10YR3/2 黒褐色粘土。マンガン粒を多く含む。層厚30cm以上。

4. 発見遺構と出土遺物

調査では、溝跡を1条確認した。遺物は基本層II層から土師器片が2点出土した。

SD1溝跡（第9図）

調査区南半で確認した東西方向の溝跡である。大きさは幅1.9m以上、長さ1.0m以上である。北側の遺構上端は搅乱により失われており、南側は調査区外に延びる。

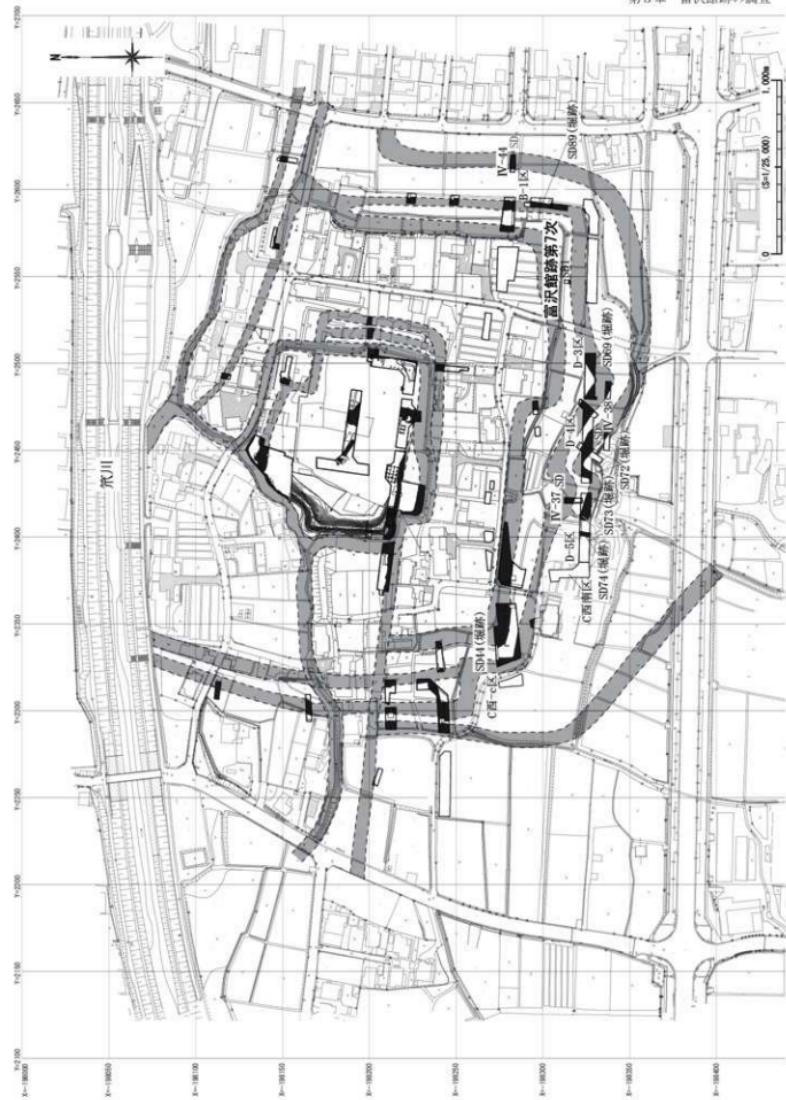
予定掘削深度の関係から深度約30cmのサブトレンチを掘削するにとどまり、完掘していない。確認した堆積土は1層のみで、遺物は出土していない。

5. まとめ

今回の調査地点は富沢館跡の南部に位置する。今回の調査では、調査区南半部が溝跡の中に収まっていることを確認した。この溝跡は、第4次調査B-1区SD89溝跡およびB-3区SD69溝跡と、規模・堆積土において類似性がみられることや、位置関係から同一の遺構であると判断される。また、この溝跡は城館跡に伴う堀跡の想定範囲上に位置しており、規模からも堀跡と考えられる。

引用・参考文献

仙台市教育委員会 2018 『銀治屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか－仙台市富沢駅西土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書－』 仙台市文化財報告書第466集



第10図 富沢館跡 検出範囲位置図（仙台市文化財調査報告書第466集所取の図を改変）



1. 調査区全景（北から）



2. 東壁断面全景（南西から）



3. 東壁断面1（西から）



4. 東壁断面2（西から）



5. 東壁断面3（西から）

写真図版3 富沢館跡第7次調査

第4章 中田北遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

中田北遺跡は、仙台市の南端、名取市との境に近く、JR 南仙台駅の南東約 1.0km に位置する。付近一帯は名取川が形成した自然堤防と後背湿地、旧河道が複雑に入り組んだ地形となっており、遺跡の中心となる標高 6m 前後の自然堤防の北側には旧河道が存在し、南側には後背湿地が広がっている。遺跡の一部は後背湿地に及んでいる。

遺跡の北側を流れる名取川対岸の富沢地区は、自然堤防の形成が早く、縄文時代中期頃から集落が形成されているが、中田地区周辺の沖積地に遺跡が認められるようになるのは、弥生時代になってからで、後河原遺跡や戸ノ内遺跡、安久東遺跡、中田南遺跡などで当該期の土器が出土している。古墳時代になると、戸ノ内遺跡と四郎丸館跡にかけての地域や安久東遺跡などに集落と方形周溝墓がつくられている。それ以降は、古墳時代、奈良時代、平安時代を通して次第に多くの遺跡が形成され、遺跡の分散・拡大が認められる。また、後河原遺跡では、四面に廂をもつ掘立柱建物跡を中心に数棟の建物群も検出され、農村とは異なる性格の集落も認められる。中世では安久東遺跡、中田南遺跡、四郎丸館跡に屋敷ないし城館が形成されている。

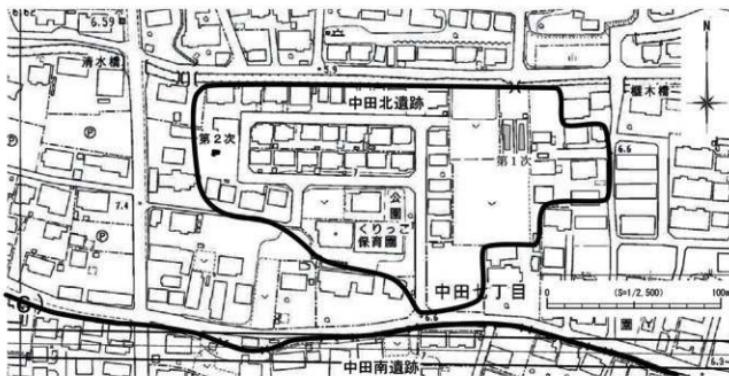
中田北遺跡では、第1次調査で初めて竪穴住居跡が1軒検出された（仙台市教委 2006）。土師器壺・甕、須恵器壺が出土し、それらの特徴から9世紀後半頃の竪穴住居跡と推定されている。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	中田北遺跡	散布地	自然堤防	古代	11	安久東遺跡	聚落跡	自然堤防	縄文～中世
2	中田南遺跡	聚落跡	自然堤防	縄文・弥生・古代・中世	12	伊豆野遺跡・古墳	古墳	自然堤防	古墳
3	埋蔵遺跡	聚落跡	自然堤防	古代	13	中田井上遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
4	前田指跡	地盤跡	自然堤防	中世	14	中田井上遺跡	聚落跡・施設跡	自然堤防	古墳・古代
5	後河原遺跡	古墳・水田跡	自然堤防	弥生・古墳	15	神明遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
6	中田中遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	16	今天沼古墳	古墳	自然堤防	古墳
7	前沢北遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	17	四郎丸館跡	聚落跡・方形周溝墓	自然堤防	古墳・古代・中世
8	打手遺跡	散布地	自然堤防	古代	18	戸ノ内遺跡	聚落跡・方形周溝墓	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世
9	鬼塚跡	聚落跡	自然堤防	弥生・古墳・古代	19	後丸古墳	古墳	自然堤防	古墳
10	安久東遺跡	聚落跡・城郭跡	自然堤防	弥生・古墳・古世	20	山崎山古墳	古墳	自然堤防	古墳

第11図 中田北遺跡と周辺の遺跡

第2節 第2次調査



第12図 第2次調査区位置図

第2節 第2次調査

1. 調査要項

- 遺 踪 名 中田北遺跡（宮城県遺跡登録番号 01271）
 調 査 地 点 仙台市太白区中田 7 丁目 5 番 25
 調 査 期 間 平成 30 年 8 月 2 日・3 日
 調査対象面積 108.47 m²
 調査面積 10.0 m²
 調査原因 個人住宅の建築工事
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育生涯学習部文化財課調査調整係
 技術員主任 及川謙作 主事 小林 航



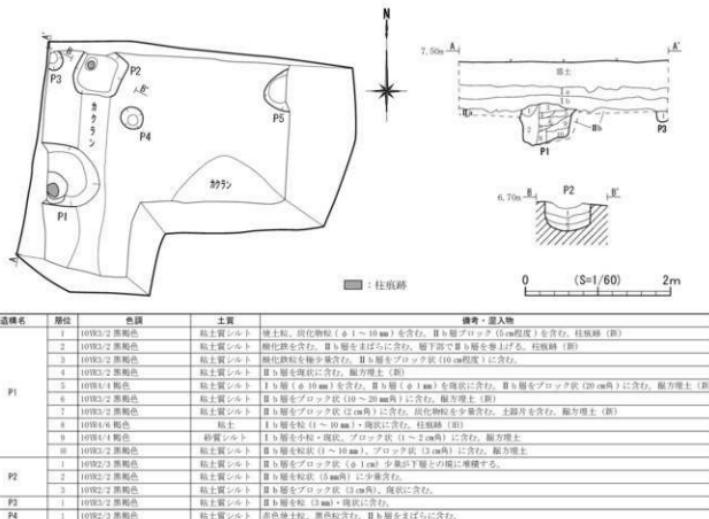
第13図 第2次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より平成 30 年 6 月 28 日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成 30 年 6 月 29 日付 H30 教生文第 102-139 号で通知）に基づき実施した。

調査区は建築範囲内に 2.0 × 4.0m の規模で設定し、重機により盛土および I 層を除去した。II b 層上面 (GL-0.7 ~ 0.75m) で遺構検出作業を行ったところ、ピット 5 基を確認した。うち 1 基は調査区南西側に延びており、柱痕跡などから掘立柱建物跡を構成する可能性も考えられたため、調査区の南西側の 1.0 × 2.0m の範囲を拡張して規模を確認した。

調査では調査区平面図 (S=1/20)、調査区配置図 (S=1/40)、調査区西壁断面図 (S=1/20)、また必要に応じて遺構断面図 (S=1/20) を作成し、記録写真の撮影はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、重機で複数回に分けて締固めを行いながら埋戻しを行い、調査を終了した。



第14図 第2次調査区平面・断面図

3. 基本層序

今回の調査では、盛土（層厚40cm）の下で、基本層を4層確認した。

I a層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。しまりがやや強い。酸化鉄を粒状に少量含む。層厚 15cm。

I b層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。しまりがやや弱い。酸化鉄を多く含み、褐色粘土を粒状～ブロック状に含む。層厚 13～22cm。

II a層：10YR4/4 褐色砂質シルト。しまりがやや弱い。黒褐色粘土質シルトを粒状に多く含む。調査区南側でのみ確認した。層厚 10cm。

II b層：10YR4/4 褐色砂質シルト。粘性がやや弱い。酸化鉄を層全体に含み、黒褐色粘土質シルトを粒状に含む。層厚 50cm以上。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、ピット5基を検出した。うち2基はやや大型の柱穴であり、掘立柱建物跡を構成する可能性がある。遺物は、基本層から土師器・陶器・磁器、柱穴跡から土師器が出土した。

(1) ピット

P1 (第14図)

調査区の西南部で確認した。西側は調査区外に位置する。擾乱により上面の一部が削平されている。平面形は梢円形を呈すると推測される。規模は東西80cm以上、南北80cm、深さ 55cmで、断面形は箱型を呈する。柱痕跡はピット南端にあり、直径は上部で25cm、下部で20cmである。

堆積層は柱痕跡を含め10層に分層した。平面では切り合はは認められなかつたが、断面観察では、より新しい

第2節 第2次調査

柱痕跡（1・2層）および埴方埋土（3～7層）が、より古い柱痕跡（8層）および埴方埋土（9・10層）を切っていることを確認した。遺物は新しい柱痕跡から、内面黒色処理が施された土師器の底部の破片が出土した（写真図版5-4）。底部は摩滅しているが、回転系切り無調整と推測される。

P2と共に掘立柱建物跡を構成する可能性があり、P2との柱間寸法は約1.8mである。

P1 出土遺物観察表

回数 番号	番号	出土 場所	層位	種別	基準	法量(cm)	外面	内面	備考	写真 図版
-	0-1	P1	堆積上	土師器	正	6.0	ロクロナゲ 法量: 106cm ² (横底)	ヘラミ子キ 黒色処理	-	5-4

P2（第14図）

調査区の北西部で確認した。北側の一部が調査区外に位置する。搅乱により上面の一部が削平されている。平面形はほぼ方形を呈する。規模は50×60cm、深さ40cmで、断面形はやや浅いU字型を呈する。柱痕跡は断面では確認できなかつたが、底面に直径10cmの円形の痕跡を確認した。

堆積土は3層に分層した。遺物は土師器片が出土した。

P1と共に掘立柱建物跡の一部である可能性がある。

その他出土遺物

1層から少量の土師器片、近世～近代の陶器片、磁器片が出土している。

5.まとめ

今回の調査地点は中田北遺跡の西部に位置する。北西側では2箇所で確認調査が行われているが、平成4年の調査では遺構が確認されず、平成20年の調査ではピット113基が確認され、土師器片約15点が出土した。

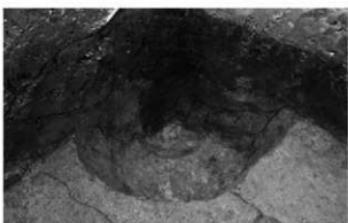
今回の調査ではピット5基を確認した。うち2基は柱痕跡が確認でき、掘立柱建物跡の一部を検出した可能性がある。P1の柱痕跡からは、内面黒色処理が施された土師器の环の底部が出土し、底部は摩滅しているが、切り離し技法は回転系切り無調整と推測されることから、およそ9世紀頃と考えられる。

参考文献

仙台市教育委員会 2006 『前田館跡他 発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第301集



1. 遺構検出状況（東から）



2. P1 断面（北東から）



3. P1 完掘状況（東から）



4. P2 断面（南西から）



5. P2 完掘状況（東から）

写真図版4 中田北遺跡第2次調査（1）

第2節 第2次調査



1. 遺構完掘状況（南から）



2. 遺構完掘状況（東から）



3. 掘立柱建物跡（東から）



4. P1 出土遺物

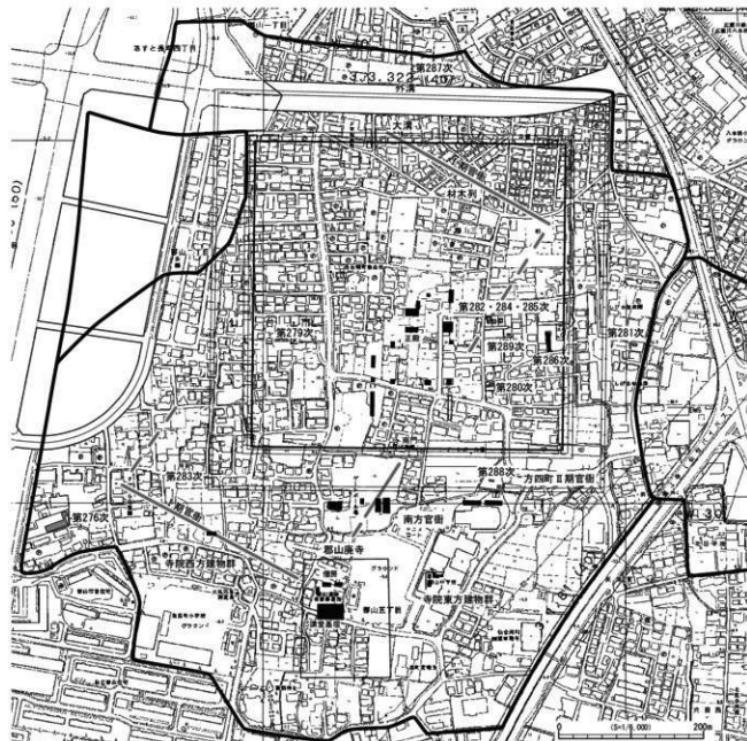
写真図版5 中田北遺跡第2次調査（2）・出土遺物

第5章 郡山遺跡の調査

平成29年度末から30年度にかけて実施した発掘調査は、第15図の通りである。なお、個人住宅建築に伴う発掘調査の結果および抄録は、仙台市文化財調査報告書第478集『郡山遺跡39』に所収している。

調查次數	調查地區	調查面積	調查期間	調查原因	評分
第 276 次	鹿山鄉東南區	約 21.7 公頃	平成 30 年 6 月 2 日 ~ 5 月 31 日	專科：新竹市理據地	園圃地：未作土壤調查
第 278 次	頭前溪流域	約 15.0 公頃	平成 30 年 5 月 23 日 ~ 3 月 14 日	專科：新竹市理據地	園圃地：未作土壤調查
第 279 次	竹南鎮東南區	約 15.0 公頃	平成 30 年 4 月 18 日	個人住家園地	園圃地：未作調查
第 290 次	頭前溪流域	約 42.5 公頃	平成 30 年 5 月 7 日 ~ 5 月 25 日	個人住家園地	園圃地：未作調查
第 291 次	鹿山鄉東南區	約 22.0 公頃	平成 30 年 4 月 4 日 ~ 6 月 8 日	個人住家園地	園圃地：未作調查
第 292 次	頭前溪流域	約 20.0 公頃	平成 30 年 6 月 12 日 ~ 7 月 13 日	個人住家園地	園圃地：未作調查
第 293 次	鹿山鄉西南區	約 24.0 公頃	平成 30 年 7 月 8 日 ~ 7 月 23 日	長照住家園地	園圃地：未作土壤調查
第 294 次	頭前溪流域	約 26.0 公頃	平成 30 年 7 月 23 日 ~ 7 月 31 日	個人住家園地	園圃地：未作調查
第 295 次	頭前溪流域	約 30.0 公頃	平成 30 年 8 月 1 日 ~ 8 月 7 日	個人住家園地	園圃地：未作調查
第 296 次	頭前溪流域	約 134.75 公頃	平成 30 年 9 月 13 日 ~ 10 月 22 日	草地地盤	園圃地：未作土壤調查
第 297 次	鶯山鄉北區	約 5.3 公頃	平成 30 年 10 月 10 日	道路交岔口	園圃地：未作土壤調查
第 298 次	頭前溪流域	約 30.0 公頃	平成 30 年 10 月 2 日 ~ 10 月 3 日	開闢住家園地	園圃地：未作土壤調查
第 299 次	頭前溪流域	約 15.0 公頃	平成 30 年 10 月 24 日	個人住家園地	園圃地：未作土壤調查

表3 平成30年度 郡山遺跡発掘調査一覧（一部平成29年度実施分を含む）



第15圖 郡山遺跡調查區位置圖

第6章 総括

1. 南小泉遺跡第83次調査

調査地点は南小泉遺跡の北西部に位置する。今回の調査では竪穴住居跡2軒、土坑1基、ピット2基が検出された。これらの竪穴住居跡は古墳時代から古代の時期のものと考えられる。今回の調査地点の近隣では、北側に所在する南小泉遺跡第28次調査区と北東側に位置する第33次調査区から7世紀後葉から9世紀の時期の竪穴住居跡が検出されている。また北西側に位置する養種園遺跡第1次調査区と西側に位置する第3次調査区からも6～9世紀にかけての竪穴住居跡が検出されている。今回検出された竪穴住居跡は、これら周辺の調査区で検出されている竪穴住居跡等を中心に構成された集落の一部であるものと考えられる。

2. 富沢館跡第7次調査

調査地点は富沢館跡の南部に位置する。今回の調査では、調査区南半部が溝跡の中に収まっていることを確認した。この溝跡は近隣の調査で確認された溝跡と規模・方向・堆積土などで類似性が高く、また、城館跡に伴う堀跡の想定範囲上に位置していることから堀跡と考えられる。

3. 中田北遺跡第2次調査

調査地点は中田北遺跡の西部に位置する。今回の調査ではピット5基を確認した。うち2基は柱痕跡が確認でき、掘立柱建物跡の一部を検出した可能性がある。

P1の柱痕跡からは、内面黒色処理が施された土器器の壺の底部が出土した。底部は摩滅しているが、切り離し技法は回転糸切り無調整と推測され、およそ9世紀頃と考えられる。第1次調査でも9世紀後半ころの竪穴住居跡が検出されていることから、周辺では当該期の集落が広がっていたと考えられる。

報告書抄録

仙台市文化財調査報告書第477集
仙台平野の遺跡群 29

平成30年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

2019年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉1丁目5-12
仙台市役所上杉分庁舎10階
文化財課 TEL 022(214)8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目1-14
TEL 022(231)2245㈹
